評議会だより

第429回評議会　平成2.12.11(火)　16：05～
(部局長候補者の選考結果について)
工学部長　　佐々木　和　夫

(教員選考報告)
理学部
助教授1名　山本　陽介(反応有機化学)
歯学部
助教授1名　山口　和憲(歯科矯正学)
工学部
教授1名　　桝澤　　平(機械材料工学)
生物生産学部
助教授1名　飯島　憲章(応用生化学)

(報　告)
1．国立大学教会総会及び文部省関係官との懇談会について
田中学長から，11月14，15日に開催された国立大学協会総会及び文部省関係官との懇談会の概要について，資料により報告があった。
2．広島大学放射光利用研究センター設立準備委員会要項の改正について
田中学長から資料により説明があり，11月27日付けで制定・施行した旨報告があり，これを了承した。
3．前回評議会以降の主な行事及び今後の予定について
田中学長から資料により報告があった。
4．学生生活実態調査結果の公表について
田中学長及び中谷学生生活実態調査専門委員会委員長から，資料により報告があった。
なお，田中学長から，この調査結果について，本日記者発表する旨報告があり，これを了承した。

(議　事)
1．広島大学学生証取扱細則の改正について
田中学長より提案，金田庶務課長より説明があり，提案どおり承認し，本日付けで制定し，平成3年4月1日から施行することとした。
2．平成4年度広島大学入学者選抜大学入試センター試験及び個別学力検査の実施教科・科目等について
田中学長より提案，上里学生部長より説明があり，提案どおり承認した。
なお，上里学生部長から，平成4年度大学入試センター試験及び個別学力検査の実施教科・科目の変更点について公表したい旨報告があり，これを了承した。

第430回評議会　平成3.1.8(火)　15：05～
(部局長候補者の選考結果について)
理学部長　　西　川　恭　治

(教員選考報告)
留学生センター
助教授1名　田畑　佳則
保健管理センター
講師1名　　関谷　　融
教育学部
助教授1名　草間眞知子(音楽教育学)
法学部
助教授1名　鈴木　眞次(民事法)
理学部
助教授2名　辻　　昭雄(核物性論)
　　宮村　　修(固体物理学)
医学部
講師1名　　濱中　喜晴(外科学第一)
歯学部附属病院
教授1名　　河原　道夫(歯科麻酔科)
工学部
教授2名　　中村　雄治(建設構造工学)
　　信川　　壽(船体構造学)

（報　告）

1．平成３年度新規概算事項内示概況について

柴田経理部長から，資料により報告があった。

2．前回評議会以降の主な行事及び今後の予定について

田中学長から，資料により報告があった。

（議　事）

1．広島大学附属学校部長選考規程の改正について

田中学長より提案及び説明があり，提案どおり承認し，本日付けをもって制定・施行することとした。

2．広島大学附属学校長・園長選考規程の改正について

田中学長より提案，金田庶務課長より説明があり，提案どおり承認し，本日付けをもって制定・施行することとした。

編集後記

歳も改まって平成３年の新春，今年も広島大学を去って行かれる方々をお送りする時期にきた。長年広島大学で御活躍され，広島大学および社会に多くの貢献をされたこれらの方々に，心から感謝申し上げるとともに，これからの残された人生を悔いなく全うされることをお祈り申し上げる次第である。本号では例年にならって「退職者を送る」と題した特集を組んだ。短い文章ではあるが在職中の御活躍の軌跡を読み取ってほしい。時は20世紀最後の10年のスタートの年である。国際協調を精力的に進めている現代社会は，大学に対して「開かれた，そしてアイデンティティーと豊かな国際性を伴った質の高いユニバーシティ」を求めている。新年早々にある恩師にお会いしていろいろお話をうかがった。昔はどの大学へ進学するかはその大学の「学風」で決めていた。この「学風」を形成する要素はいくつかあるが，中でも最も大きなウエイトが置かれていたのは大学における教育のあり方である。大学では，ただ知識を教授するだけではなく，「学問・研究を行う場合，それをどのように進めて行けばよいか，すなわち方法論を教授すること」にかなりのエネルギーが注がれていた。そしてこの教授の仕方に各大学や教授によって個性的なものがあった。微に入り細にわたって教授する大学，おおまかな概略だけを教授し，あとは学生の自主的な勉学を促すことにその力点をおいた大学など様々であった。そして大学生あるいは大学を卒業した者とは，この「学風」を身につけた者で，社会もこれを認めて受け入れていた。このような内容のお話であった。現代の大学に要求されている，アイデンティティー豊かな大学の建設を考えようとすると，「社会が要求する先端的知識の教授と，限りない先端的研究を推し進めるための組織づくり」に捉われ過ぎて，以前の「学風」なるものが軽んじられているように筆者には思える。もちろん，これまでの大学に見られないユニークな組織作りは必要である。しかし，どんなに際立った斬新な組織を作っても，そこでの教育に対する哲学がなかったなら社会にアピールしない。大学として，「何をどの程度のレベルまで身に付けた学生を責任を持って社会に送り出すか，すなわち教育目標」をはっきりさせることが必要なのではないであろうか。また，日本人は全体の秩序の維持を重視する傾向にある。大学はあまり秩序立てることを重視すると，本来の使命を全うするための活力が損なわれる。エントロピーが若干増大する傾向にあっても，自由エネルギーを完全燃焼させるくらいの「節度ある無秩序」にあるのが望ましいのではないであろうか。そこでは，構成員一人ひとりの「節度ある無秩序の維持に対する努力」が望まれる。大学における広報活動の一番の目的は，この「節度ある無秩序を維持し，アイデンティティーに富んだ大学の建設を手助けして行くことではないか」と筆者は思う。広島大学においても広報活動は非常に重要である。そして「広大フォーラム」は本学におけるアイデンティティーを学内外に伝える広報活動のメディアとして重要である。

（第22期広報委員会委員長　川上英之）